（講　演）

日本における英語研究のはじまり（1808-1862）

平岡　隆二
（日本思想史・科学史）

1．出島とオランダ通詞

日本における本格的な英語研究は、江戸後期、19 世紀初頭の長崎ではじまった。

当時の長崎は、日本で唯一、オランダ・中国の両国と直接交易することが許された国際貿易都市だった。江戸の徳川幕府は、諸外国との交流や貿易を特定の場に制限して管理・統制する、いわゆる「鎖国」政策を採っていた。その中で、九州の西端に位置する長崎は、幕府から派遣された長崎奉行が直接統治する直轄港で、オランダ・中国との貿易だけではなく、キリスト教の禁教、沿岸防備、海外情報の管理・統制など、幕府の対外政策の中核を担う重要港であった。

後に述べるように、日本における英語研究開始の背景には、長崎におけるオランダの存在が重要な役割を果たしたが、彼らオランダ人の商館、倉庫、住居が立ち並び、日蘭両国を行き来するあらゆる人、モノ、情報の発着点となったのが、長崎港に浮かぶ人工島の「出島」であった。出島は 1641 年にオランダ商館が置かれて「鎖国」体制が確立して以降、1850 年代にその体制が段階的に崩壊するまで、日本にとってはオランダ（ひいてはヨーロッパ）を知るための窓口となり、またオランダにとっても、日本に関する情報を入手するための、重要な窓口であった。

図１．出島（川原慶賀筆、1850年頃）

出島における日蘭の異文化交流に重要な役割を果たしたのが、長崎のオランダ通詞である。オランダ通詞は世襲制の長崎地役人で、オランダ貿易の通訳官兼商務官として、各種通訳業務や文書の翻

訳などをつとめ、その家の総数は江戸時代を通じて 30 数家を数えた。彼ら通詞集団の中からは、日常の貿易業務だけでなく、その語学の能力を生かして、医学や天文学をはじめとする西洋学術の日本への紹介に顕著な業績を残した人物も多く輩出した。

図２．吉雄耕牛

たとえば 18 世紀を代表する通詞の 1 人である吉雄耕牛（1724-1800）は、出島のオランダ人や、最新の海外情報をもとめて長崎を訪れる知識人らと密接に交流し、18 世紀後半の「蘭学」の勃興に大きく貢献した。蘭学は、オランダおよびオランダ語を通じてヨーロッパの学問を研究する知的運動のことである。耕牛はとりわけ外科学を出島のオランダ商館付医師から直接学んで「吉雄流外科」を創始し、その弟子は 600 人とも 1000 人とも言われた。また当時耕牛の住居は「オランダ座敷」と呼ばれ、長崎を訪ねた文人や学者たちのサロンの役割も果たしていた。耕牛は自らの蔵書にアルファベットで「josiwo」と記した蔵書印を押していたが、その印の押された蘭書が日本各地に現存しており、彼の学問の幅広さを物語っている。

図３．本木良永

また耕牛と同時代に活躍した本木良永（1735-1794）は、日本に初めて地動説（コペルニクス説）を紹介したオランダ通詞である。良永は幕閣や藩主からの依頼により、天文・地理学を中心とする様々な蘭書の翻訳に携わった。同僚の吉雄耕牛も、良永の語学力について「恐らく今後このような人が出てくるとは思えない」[1] と言って絶賛した。長崎に現存する良永墓碑の銘文によると、蘭書の翻訳にあたっては諏訪神社で水ごりして仕事の成就を祈り、また病に倒れてもなお手から書を離さなかったという[2]。とりわけ彼の代表的な翻

---

[1] 「恐らくは此末如斯なる人出来ルへきとはおもはれす」、『先哲遺墨並史料』所収。

[2] 「嘗奉命訳書。時維厳冬、自灌冷水裸躰、素跣詣于諏方神廟、祷卒其業［中略］当其病之日、尚左右蘭書手不釈巻、是故益労其神、毫無所自愛而至不起乎」、本木良永墓碑銘（楢林栄哲撰、長崎市大光寺本木家墓地）。

訳書である『太陽窮理了解説』（1793 年）は、地動説を初めて本格的に日本に紹介した著作として有名である。

蘭学は、交流の制限や語学の壁などにより、研究の深化や流布に大きな困難もともなったが、その成果は明治以降に急速に進展した日本の近代化の基盤を築いたとも言われ、その中で通詞たちが果たした役割も決して少ないものではない。そうした通詞蘭学の基盤の上に、日本における初めての英語研究が成立するのであるが、その具体的な内容を見る前に、なぜそれが 19 世紀初頭の長崎で開始されたかについての時代背景をさぐってみたい。

２．フェートン号事件（1808）とその背景

日本における英語研究の開始を決定づけた歴史的要因は、通詞や為政者の個人的な関心ではなく、フランス革命に端を発する 18 世紀末ヨーロッパの政治的動乱と、その東アジア植民地への飛び火にあったと言うことができる。

1789 年に起こったフランス革命は、絶対王政と旧体制（アンシャン・レジーム）の打倒を目指した政治運動であったが、その激化とともに、旧体制の存続を望むヨーロッパ諸国とフランスとの間の戦争（いわゆる革命戦争）を引き起こした。隣国のオランダ（当時はネーデルラント連邦共和国）も無関係ではいられず、1793 年にはフランス革命軍によって占領され、フランスの衛星国となる。さらにナポレオン（1769-1821）台頭後の 1810 年には、フランスによって直轄領化され、オランダという国家は事実上消滅してしまった。この状況は 1813 年にナポレオン帝国が崩壊し、ウィーン会議を経て、新たにネーデルラント連合王国として独立を果たすまで続いた。

以上のような経緯により、アジアにおけるオランダの植民地（オランダ領東インド。現在のインドネシアにほぼ相当）も、19 世紀初頭にはフランス革命政府の影響下に置かれることになる。また同じ頃ヨーロッパでは、イギリスがフランスに対抗するさまざまな動きを見せていたが、やがてアジアにおけるオランダ植民地の奪取と支配を目指し、艦隊を派遣した。すなわち、ヨーロッパにおける仏・英の対立が、そのままアジアのオランダ植民地で展開されるという事態が発生したのである。

そのような状況下で、イギリスがアジアに派遣した戦艦の一つが、フェートン号

であった。1803年以降、アジアにおけるオランダ／フランス勢力の船を拿捕するなどの軍事活動を行っていたフェートン号は、やがて日本に滞留しているオランダ船を拿捕すべく、東シナ海を渡り、旧暦の1808年8月15日に長崎に到着した。

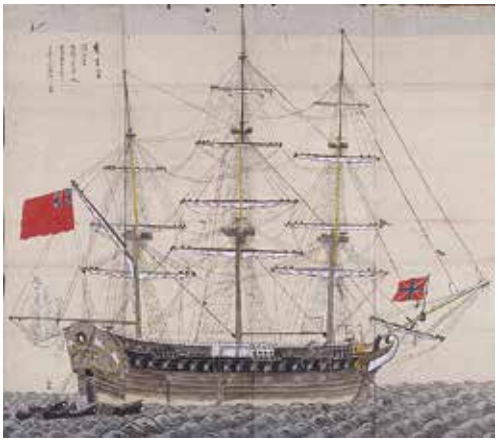

図4．フェートン号

フェートン号は長崎港への侵入にあたり、オランダ国旗を掲げて自らがオランダ船であるかのように偽装した。それがイギリス船であることを知らないまま、長崎奉行所の役人や通詞、さらに当時出島に滞在していた2名のオランダ商館員は、通例通り、入港手続きのために小舟でフェートン号に近づいた。しかし商館員2名は、フェートン号の乗組員によって瞬く間に拉致されてしまった。当時禁止されていた蘭船以外の入港を許してしまっただけでなく、さらにオランダ商館員まで人質に取られるという不測の事態に、長崎奉行をはじめとする日本側と、商館長をはじめとするオランダ側は、火急の対応を迫られたのである。

当時オランダ船は滞留していなかったので、当初の目標を失した形になったフェートン号は、日本側に飲み水と食料を要求し、さらにその要求が通らなければ港内の和船や中国船を焼き払うと脅迫した。そうして水と食料を得てからは人質も釈放し、結局翌々日17日の朝に長崎港を出帆するにいたる。日本側は、本来長崎警備のために兵を配置すべき佐賀藩が十分な配備を行っていなかったことなどから、砲門で武装したフェートン号の軍事的脅威に対して具体的な対応を取ることができず、成されるがままに出港を許す形になってしまった。当時長崎奉行だった松平図書頭は、17日夜その責を負って奉行所西役所において切腹している。

3．通詞の英語学習と辞書の作成

この事件によって、旧来の警備体制の脆弱さが露呈し、また今後のイギリスの脅威に対して喫緊の対応を迫られた徳川幕府は、翌年の1809年に、長崎奉行を通じてオランダ通詞6名に英語とロシア語の学習を命じた。それは、今後の情報収集と対応のためには、まずは英語を習得する必要があるという実務上の要請に基づく

ものであった。またこの時ロシア語の学習も同時に命じられたのは、当時日本の北方にロシア船が頻出しており、ロシアの南下に対する脅威も高まっていたことによる。またこの両語の学習を命じられたのがオランダ通詞であったことは、彼らが当時の日本において西洋語に通じた希少な職能集団であったことを考えれば、当然のことであった。以上のような経緯から、19 世紀初めの長崎で本格的な英語研究が開始されたのである。

図５．本木正栄

英語学習を命じられた通詞らの筆頭格が本木正栄（1767-1822）であった。彼は前述の本木良永の息子にあたるが、同じ時期にフランス語の学習も命じられ、その成果を幕府に提出するなど、諸ヨーロッパ語の研究に業績を残している。また通詞らによる英語学習には、1809 年に長崎に来航したオランダ商館員のヤン・コック・ブロンホフ（1779-1853）が協力することになった。ブロンホフはかつてプロシア軍に在籍していた際、イギリスに赴任した経験があり、当時の出島商館でもとりわけ英語に堪能な人物だった。

ブロンホフと通詞らは、互いの共通の言語であるオランダ語を用いて英語学習をはじめた。その過程を断片的ながら伝える資料が、オランダの国立公文書館に残されている。たとえば、本木正栄がブロンホフに対して送ったオランダ語の書翰には、

尊敬せるブロンホフ様
ここに桂皮付きの魚をお受け取り下さって、快く召し上がっていただきたく、
かつ、ご都合がよろしかったら、明朝、勉強とお話をしに参りたく存じます。

敬具
いとも尊敬せる貴下の僕　本木庄左衛門［＝正栄］[3]

[3] 片桐一男『阿蘭陀通詞の研究』（吉川弘文館、1985年）、82頁。

この書翰で正栄は、明朝英語学習のためにブロンホフを訪ねたい旨を伝えるのに、シナモン付きの魚料理を贈っていたことがわかる。また別の書翰では、

ブロンホフ様
どうか、通詞部屋で当番をしている私の御馳走のために、いくらかの砂糖をこのコーヒーに入れてください。　　敬具
尊敬せる貴下の僕　　［本木］庄左衛門［＝正栄］[4]

ここには英語学習に関する言及はないが、ブロンホフに向けて、コーヒーの砂糖をねだる内容となっている。正栄が、無事砂糖入りのコーヒーを飲むことができたかどうかは不明であるが、その内容からは、２人が親密な関係にあったことがうかがえよう。

そうした研究の成果としてまとめられ、長崎奉行所に提出されたのが『諳厄利亜興学小筌』（1811 年）と『諳厄利亜語林大成』（1814 年）である。内容は、前者は英単語集・英会話集、後者は英和辞書にあたる。とりわけ後者について述べると、これは収録語数は約 6000 と多くはないものの、日本初の英和辞書として貴重なものであり、本木家に伝わったその草稿と抜稿（完成稿）の２種が、現在長崎

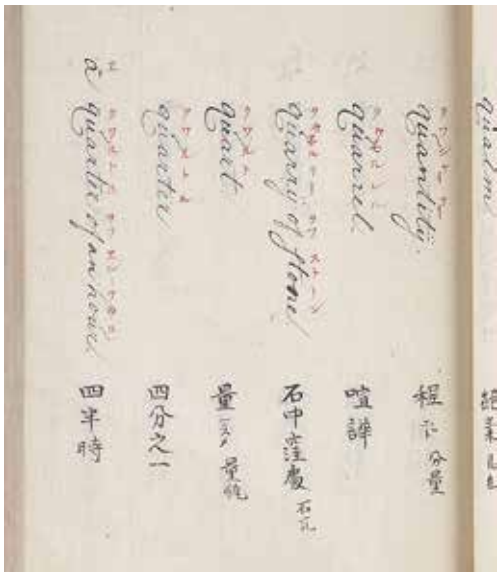

図６．諳厄利亜語林大成（抜稿）

[4] 同上、83頁。

図７．諳厄利亜語林大成（草稿）

歴史文化博物館に収蔵されている。

抜稿の方を見ると、上段に英語の見出し語とその音訳が、下段に日本語の訳語が配置され、英語は横書きで、日本語は縦書きで記されている。他方、草稿の方では、上下段の配置は完成稿と同じであるが、さらに中段に、オランダ語の訳語が朱字で添えられている。すなわち本辞書は、本来「英蘭和三ヶ国語対訳辞書」と呼ぶべき性格のものであったことが分かるが、実際通詞らは、ブロンホフと共に、オランダ語を用いて英語を学んだのであるから、彼らの作成した辞書が、三ヶ国語辞典の特徴を有していたことは、むしろ当然のことだったと言えよう。

また本辞書の冒頭に付した序文で正栄は、

> イギリスは、かつて幕府が貿易を禁止したため、その言語についていまだ知るものがない。［中略］かつて文化６年［1809］に来日したオランダ人ヤン・コック・ブロンホフという者が、英語に堪能であったため、特に命があって長崎でその役に就くことになり、われら通詞はここに初めてこの仕事に着手することができたが、その言語のことばのつづりと発音ははなはだ食い違っており、同じ地域［＝ヨーロッパ］にあり習俗も共通しているオランダ人にとってさえ困難なものである[5]。

と述べている。英語に頻繁にみられるスペリングと発音の不一致は、現代の英語学

[5]「諳厄利亜の国は、往昔其職貢を禁じ給へる故を以て、其言詞に於る爾来いまだ是を知る者有らず。［中略］前時文化己巳航来の蘭人楊骨郭歩陸無忽桴［＝ヤン・コック・ブロンホフ］なる者、是を能するを以て、特に命ありて崎陽に祇役せしめ、我訳家茲に肇て其業を創る事を得たりと雖ども、其言詞の連続、音韻の反切、殊離異乖にして、洲を共にし俗を等する蘭人も尚是を難しとする…」、井田好治「長崎本『諳厄利亜語林大成』の考察」、日本英学史料刊行会編『長崎原本「諳厄利亜後学小筌」「諳厄利亜語林大成」研究と解説』（大修館書店、1982年）、39-80頁、特に48頁。

習者のみならず、最初期の日本人学習者にとっても大きな困難であった。

また、本文から訳語の一例を挙げると、

page	パージ	葉　書冊ノ紙数［下略］
pain	ペイン	痛　又　疼ミ
pains	ペインス	苦労　倦労
to paint	ト　ペイント	画ク　又　彩絵スル
painter	ペイントル	画工　ヱシ
somebody	ソムボデイ	或ル人
somewhere	ソムウヱール	某方　又　他処
summer	ソムムル	夏　ナツ
som thing	ソムディンク	聊　イサヽカ　少シ
som what	ソムウヱツト	些　チト[6]

このように、音訳はオランダ語の発音に近いものがあるが、訳語はおおむね正確であり、名詞や動詞の違いなど文法的な区別についても比較的よく配慮されていると言える。とりわけ動詞については、上記引用における「to paint」のように、見出し語の頭に「to」を付記するという方針を採っているが、それについて同辞書の凡例では以下のように述べている。

> 動詞はすべて人のすることや作業をあらわすもので、撃つ、切る、棄てるなどのように、その動静や言行に基づいて物を動かす［表現をする］ものである。［中略］これらの動詞には、必ずその前に「to」という語を配して用いる。動詞を検索するときは、「to」を除いて、その下にある語を探すように。［中略］動名詞は、動詞の「to」を除いて、多くは「ing」を添えて動詞のように訳し、実際には形容詞のように使用する[7]。

---

[6] 『諸厄利亜語林大成（草稿）』より抜粋。

[7] 「動詞は都て人の所為・作業を現すものにして、撃ツ、切ル、棄ル等と其動静云為に由て物を動かしむるものなり［中略］凡是等の動詞には必 to 詞を冠らしめて用ゆ。若し其詞を探索せんには to を除きて其下なる詞を検査すべし［中略］動静詞は動詞の to を去て、多くは ing を添て

ここでは、動詞の名詞化（動名詞）にあたっては、頭の「to」をとって、後ろに「ing」を付け加えると述べ、かつそれが形容詞のように使用されることを指摘している。いずれも基礎的な英文法理解に基づく記述として、注目に値しよう。

その後も長崎では、1848 年にアメリカ人ラナルド・マクドナルド（Ranald MacDonald、1824-1894）による通詞 14 名への英語教授が行われ、さらに 1851～1854 年にかけては大規模な英和辞書『エゲレス語辞書和解』の編纂が進められるなど、オランダ通詞による英語研究は、断続的ながらも継続して行われ、幕末の動乱期から明治期へと継承されたのであった。

４．おわりに

以上見てきたように、日本における英語研究のはじまりは、「鎖国」体制下の長崎で活動したオランダ通詞による学術研究の蓄積と、フランス革命に端を発するヨーロッパの政治的混乱のアジアへの飛び火と言う、内的・外的要因の双方が絡み合って成立したものであった。

さらに英語に対する需要は、1853 年にアメリカのペリー艦隊が日本に来航し、強硬な態度で通商を要求するに至って、さらに加速度的に高まることになった。とりわけペリー来航以降の重要な仕事に、オランダ通詞の堀達之助（1823-1894）が 1862 年に刊行した『英和対訳袖珍辞書』の出版を挙げることができる。達之助は、通詞としてペリーとの交渉に活躍し、のちに幕府が江戸に設置した洋学研究機関「蕃書調所」（東京大学の前身の１つ）の教授方等を歴任した。

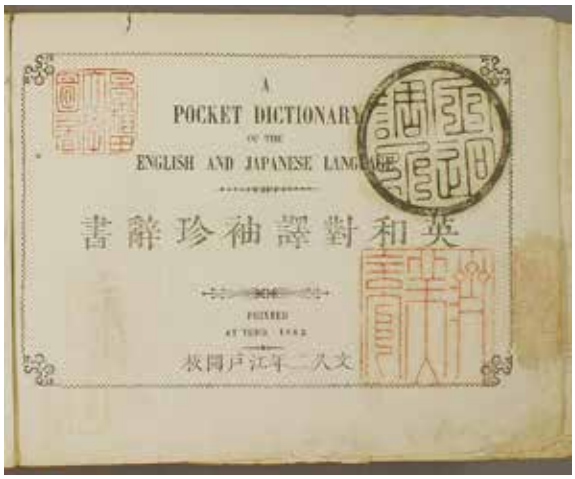

図８．英和対訳袖珍辞書（早稲田大学図書館蔵）

『英和対訳袖珍辞書』は、通詞らによるオランダ語辞書作成の成果もふんだんに取り入れて編纂されたもので、長崎通詞がオランダ語の知識

以て動詞の如くに訳して、還て虚静詞の如くに使用せる…」、同上、64-65頁。

を駆使して英語研究に取り組み、一つの頂点に達したものとして高く評価されている。同辞書はその後改訂版や海賊版などの形で版を重ね、1887 年（明治 20）頃まで広く普及した。すなわち、長崎の蘭学の伝統と通詞の業績は、日本の英学の基礎を築いたと言うことができるであろう。

注記：資料は特に明記しない限り長崎歴史文化博物館収蔵品を用いた。